教材活用例（7）「僕らの手で」

〔中学校第１学年　主題：地域の伝統を受け継ぐ　内容項目：４の（８）〕

（１）開発資料の実際

ア　素材の説明

（ア）素材の概要

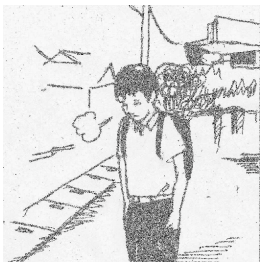
〈素材―里めぐり音頭―について〉

「里めぐり音頭」は府中町盆踊り保存会が保存継承しているもので，歌詞の中には府中町の自然や名跡が随所に出てくる。形としては，歌と扇子を小道具とした手踊りと太鼓で成り立っている。また，一時期継承者不足から踊りそのものがすたれかけたという経緯がある。現在は府中町盆踊り保存会の活動の一環として公民館等での練習，毎年開かれる盆踊りや地域の祭り等での披露など，伝承継承の取組が行われている。

昭和40年代（1965年）	府中や向洋等で盛んに盆踊りが行われていたが，だんだん衰退する。
昭和55年頃	地域の中から，踊りを残そう，資料を集めようという動きが始まる。
平成8年頃（1996年）	年配の方に踊りを習い保存活動が始まる。
平成20年	府中緑ヶ丘中学校の1年生を対象に，総合的な学習の時間において「里めぐり音頭」を題材とした学習を始める。「里めぐり音頭」を体育祭で披露。
平成21年	取組2年目。
平成22年	取組3年目。昨年度取り組んだ2年生が1年生に踊りの指導をする取組が新たにスタート。

（イ）４コマ絵

主人公ユウジの思いを中心に起承転結を設定した。伝統継承の取組にいまひとつ気持ちがのらないユウジ。しかし，保存会のおじいさんの姿に圧倒され，さらに保存活動の一端を知ったユウジは，もっと積極的に関わってみようと決意するようになる。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	幼なじみのリョウと会話するユウジ。体育祭で盆踊りをするのか？と笑われたユウジは，伝統を受け継ぐ大切な活動なんだよ，とリョウに説明しながらもなんとなく自分でも気持ちが乗らないことに，ちょっと憂鬱になっている。	暑い中，連日体育祭の練習で踊りを練習するユウジ。扇子をまわしながらため息をつくユウジの前に，汗びっしょりで踊る保存会のおじいさんがいた。汗もぬぐわず声を張り上げるおじいさんにユウジは圧倒される。	複雑な思いをリョウに聞いてもらおうと思ったユウジだが簡単にあしらわれ，釈然としない。そんなとき，リョウから，保存会の人たちの踊っている様子を聞いた。若い人がおらず受け継ぐ人のいない中もくもくと練習している保存会のおじいさんと，ニコニコ声をかけてくれたおじいさんが重なりユウジは胸がいっぱいになる。	体育祭本番，ユウジは精一杯踊った。笑いながら聞いてくるリョウに，ユウジは胸を張って「頑張って気持ちよかったよ。」と答える。「でも，それだけじゃないんだ。」そう話すユウジの顔は晴れ晴れとしていた。

イ　資料の解説

【作成の要点】

郷土を愛し大切にするということは，今，自分たちが生活している郷土を長い間にわたって創り上げてきた伝統と文化，先人の努力に思いをはせ，そのことに対する感謝の心をもつこと，そしてそれを後の人々のために引き継ぎ発展させていくことである。

中学生になるとなかなか地域の行事に足を運ばなくなり，郷土の伝統的なものにも関心が薄れていく傾向にある。それらを補う手段の一つとして，地域行事に関する活動を学校で取り組むことが考えられる。郷土の自然や史跡，保存する方々の思いを学ぶ活動を通して，郷土に育まれた伝統に触れることができる。そして，それを実際に体験することを通して，地域社会の一員としての自覚を促すことができる。

ここでは，このような生徒の実際の体験を資料化し，追体験させることで主人公への共感をよび，資料の世界へ入り込ませていきたい。生徒たちは自分たちが体験した世界へもう一度戻っていき，そのときの思いやそれまでの学習を想起することができる。そのことにより，これまで以上に積極的に地域に関わっていこうとする意欲に結びつくと考えた。

本校の事前のアンケートによると，幼稚園時代や小学校時代には半数近くの生徒たちが地元の盆踊り会場に足を運んでいた。しかし，それはあくまで家族に連れられて見にいったに過ぎず，実際に会場で踊った生徒や自分で参加しようと会場に行った生徒はほとんどいないのが現状であった。踊りを知らない，なんとなく恥ずかしい，興味がないなど理由はさまざまであるが，中学生は地域行事や伝統を継承することへの関心が薄いという実態が窺い知れる。

この授業を通して，地域の伝統行事を保存・継承している人たちの熱い思いを改めて感じ取ることや自分たちの取組がどれだけ地域の人々を勇気付けているかを知ることで，地域に関心をもち，より積極的に関わっていこうとする実践力をつけたいと考える。

【心に響くちょっといいはなし】

学校としての取組の１年目には，指導する教員自身も郷土に対する知識があまりないことを思い知らされた。生徒と一緒に学ぶという形で，教員自身も地域について多くのことを学ぶことができた。また，生徒と一緒に歌詞に出てくる自然や史跡をめぐる活動を通して，その場所を知っている生徒が教員にさまざまなことを教えてくれたりして，親睦も深まった。実際の踊りの指導では，保存会の方々に何度も来校していただき，まずは教員全員で踊りを習った後，生徒たちに手取り足取り指導をしていただいた。体育祭での発表には，多くの方々に見ていただくことができ，大いに盛り上がった。

取組２年目の夏，前年度に歌を担当した生徒が，盆踊り会場に自ら行ったそうだ。そして，会場で一緒に歌を歌ってくれたとのことで，保存会の人たちも非常に喜んでくださった。

取組３年目には上級生が下級生に指導する形ができ，学校としての新たな伝統が生まれていくことが期待される。また，学校での取組だけで終わるのではなく，多くの生徒が地域行事に積極的に参加していくようになり，まさに双方向の連携がより一層進んでいくことが期待される。

ウ　資料全文

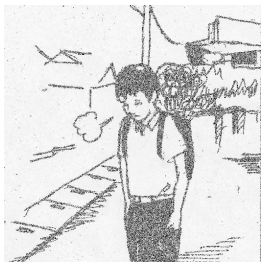
僕らの手で

資料１

「そういえば，おまえの中学校ってさあ，体育祭に盆踊りやるんだって？」
仲良しのリョウにそう聞かれて，ユウジはちょっと下を向いて答えた。
「そうだよ。『里めぐり音頭』っていうんだ。」

ユウジは広島市近郊の市街地･府中町に住む中学 1 年生だ。幼なじみのリョウは引っ越して隣の中学校に行くようになったが，同じ町内に住んでいるので，今でも付き合いが続いている。

「それがさあ，聞いてくれよ。府中町に古くから伝わる踊りなんだってさ。いっときは踊る人がいなくなって，すたれかけてたらしくて。それで，なんでか知らないけど，僕らがやることになったんだ。僕らの手で伝統を受け継ぐんだってさ。」
それを聞いてリョウは少し首をかしげた。
「そんな踊り，府中町にあったっけ？」
ユウジも苦笑いをしながら答える。
「僕だって全然知らなかったよ。でも，歌詞とかにさ，みくまりとか，榎川とか，えのみやさんとか，いっぱい知ってるところが出てくるんだ。踊りや歌は，保存会のおじいさんたちが毎回教えに来てくれるんだけど，その踊りもけっこう難しいんだよ。何度も練習して，だいぶんできるようになったんだけどさ。」
「ふーん・・・ソーランなら激しいし，かっこいいけどなあ。里めぐり音頭かあ。なんか，古い踊りって感じだよな。」
「うん・・・ここんとこ毎日暑いしさあ・・・やってらんないよ。」



次の週もユウジの学校では，体育祭の練習が続いていた。
「今日も頑張ってくださいよ。」
保存会のおじいさんたちが，通り過ぎる生徒たちに，ニコニコと声をかけている。
「ヤーットセー !!　ヤーットセー !! 」
ユウジは，みんなと一緒になって大きく「合いの手」をいれながら扇子をまわし続けた。
「暑いなあ・・・」
ユウジはおおげさにため息をついてあたりを見わたした。ふと，後ろを振り向くと，一人のおじいさんが踊っていた。シャツがぐっしょりぬれている。落ちる汗もぬぐわず，声をはりあげて踊るおじいさんの姿に，ユウジは圧倒されてしまった。

資料２

夕方，ユウジはリョウと公園に行った。
「おれ・・・わかんなくってさあ・・・」
ユウジは，ためらいがちに話しかけた。
「何が？」
「おじいさん，なんであそこまで熱心にやるんだろうって思ってさ・・・」
「好きなんだろ？『里めぐり音頭』って踊りが。それだけさ。」
(・・・・・)

目をそらしたユウジにかまわず，リョウはどんどん話してくる。
「そうそう，こないだの夜な，遅くなった帰りに田所神社の前を通ったんだ。そしたら，太鼓の音が聞こえてきてさ，これってユウジが言ってた『里めぐり音頭』かって思って，ちょっとのぞいてみたんだよ。そしたらさ，何人かのおじいさんたちが，なんか楽しそうに踊ってたよ。」
「楽しそう？」
「うん。・・・でも，ずいぶん小さい輪でさ，たったこれだけの人数でやってんのか？って感じだったなあ。それにさ，よく見たら，若い人がぜんぜんいないんだよ。そこにいた，おじいさんたちが話してたのが聞こえたんだけどさ。」

・・・・・・『今度の盆踊りには，たくさん踊ってくれるとええがのお。』
『じゃが，最近の人は踊りに来んねえ。』
『そうそう，会場に来とっても，踊りの輪に入ろうとはせんでしょう。』
『踊っとるのは，年寄りだけですよ・・・。』
『わしらがおらんようになったら，この踊りはどうなるんかいの・・・。』
『さみしいことよの・・・。』

ユウジはうつむいて，唇をかみしめた。
(今日も頑張ってくださいよ・・・。)
みんなにニコニコと声をかけていた保存会のおじいさんたち。その笑顔の裏には，どんな思いがあったのだろう。小さな踊りの輪を想像してユウジは胸がいっぱいになった。

体育祭での「里めぐり音頭」本番。
「ヤーットセー !! ヤーットセー !! 」
ユウジは思いをこめて声を張り上げた。踊りは大成功だった。踊りのあとには，あたたかい拍手が会場中にひびいた。退場するとき，保存会の人たちのいるテントをチラッとみたユウジは，満面の笑顔で拍手するおじいさんを見つけた。大粒の汗をぬぐうユウジを，風がさわやかに通りぬけていく。ユウジは思わず心の中でガッツポーズをしていた。

次の日，ユウジはリョウと図書館へ行った。行く途中，リョウが後ろから声をかけてきた。
「『里めぐり音頭』，どうだった？」
「うん。うまく踊れて気持ちよかったよ。」
ユウジは前を向いたまま，きっぱりと答えた。
「そっか。頑張ったんだな。」
「うん。でも，それだけじゃないんだ。」
ユウジは，振り向くとさわやかに笑った。

資料３

保存会の人のお話

―――――― 私は，この素朴な踊りが大好きなんですよ。府中の名所も，いっぱい出てくるしね。誰でも気軽に参加して踊れる素晴らしい踊りだと思うとるんです。

―――――― でも最近の人は，盆踊りにも行かんねえ。来とっても踊りの輪に入ろうとはせんでしょう。踊っとるのは年寄りだけですよ。さみしいことです。盆踊り自体がなくなった地域もありますよ。

―――――― 里めぐり音頭もね，わしらに踊りを教えてくれた人は，もうみーんな死んでしまっとるんです。わしらがいなくなれば，この府中の踊りは本当に途絶えてしまう。なんとかして残さにゃいかん，と思いました。

―――――― だから，中学校が取り組んでくださるときいて，そりゃあー，うれしかったですよ。よろしゅうお願いします，という気持ちでした。これで若い人にやってもらえる，という喜びでいっぱいでした。

―――――― 実は，去年歌を担当した子が今年の夏の盆踊りに来てくれたんですよ。そして一緒に歌ってくれたんです。非常にうれしかったですね。中学生の子も地域の子なんです。地域で生きとるんですよ。一人でもいいから，ああやって加わってくれる子が出たら，本当に嬉しいです。

エ　授業展開例　ー学習指導案（略案）ー

ユウジの人間的な成長に共感し，より自発的な態度を求めていく展開
～　体験を想起させる発問の工夫を生かした指導　～

（ア）主題名　地域の伝統を受け継ぐ　４－（８）

（イ）ねらい　「里めぐり音頭」の取組を通して，地域の伝統を受け継ぐことの大切さを自覚していく主人公の心情に共感し，伝統を受け継ぐために自らができることを積極的に考える態度を育てる。

（ウ）資料名　「僕らの手で」

（エ）学習指導過程

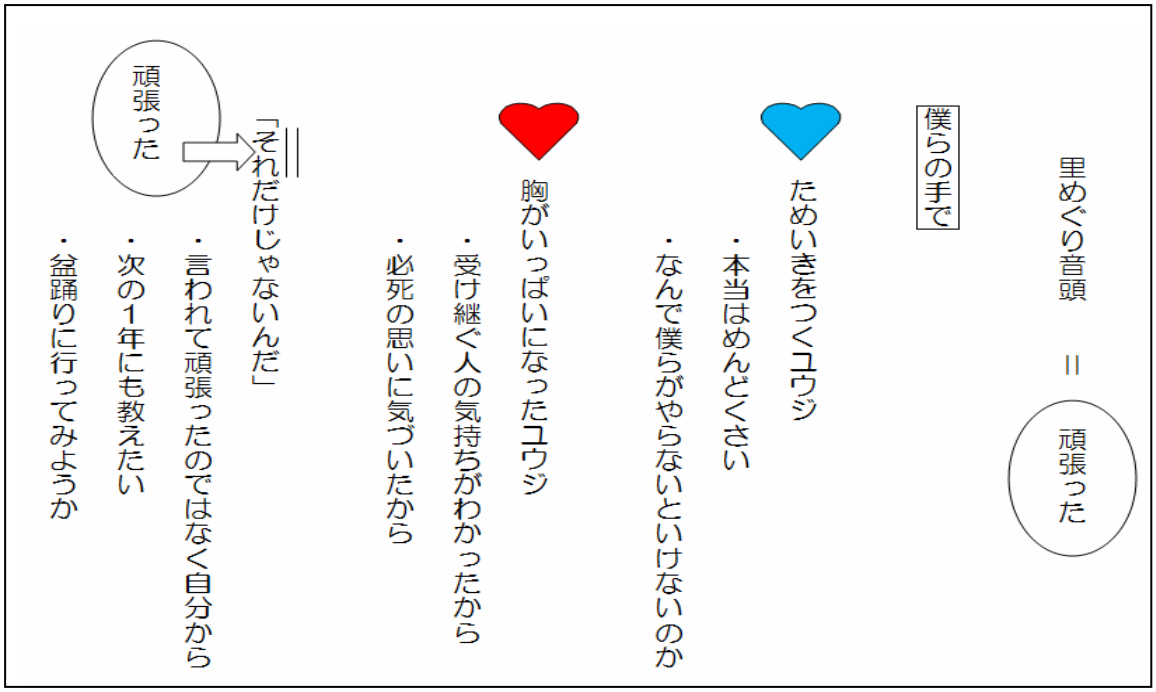
	学習活動	主な発問と生徒の心の動き	留意点 （☆評価の観点）
導入	１　盆踊りに関するアンケートの結果を聞く。	○　盆踊りに参加する人は少ないが，全くいないわけではないということに気付く。	○　盆踊りが中学生の日常生活とは，やや離れている現状に気付かせる。
展開	２　資料１を読み，場面を把握する。	○　おおげさにため息をつくユウジの心の中はどんなだっただろう。 ・暑いし，しんどい。 ・本当は，もうやりたくない。 ・頑張ってはいるが，いまいち気持ちが乗らない。 ・この踊りをやる意義が，自分にはまだわからない。	○　ユウジのとまどいやしんどさに共感させる。 ○　補助発問や切り返し発問で，自分たちの心の中の否定的な意見や弱い部分を出させる。
	３　資料２の前半を読み，ユウジの心を読み取る。	◎　「胸がいっぱいになった」とあるが，ユウジはどんなことを考えたのだろうか。 ・知らなかった。 ・受け継ぐ人がいなくてもなんとか頑張って保存していこうという強い思いがあるんだ。 ・おじいさんの笑顔の裏に，伝えなければ踊りがすたれてしまうという必死の思いがあることに気付いた。	○　補助発問や切り返し発問で実際の保存会の人たちの言動を想起させ，思いや願いに気付かせる。 ☆　自分自身の体験に照らして主人公の思いを重ね合わせ，自分とのかかわりで思考し考えを深めることができたか。
	４　資料の続きを読む。	○　「それだけじゃないんだ」と言うユウジの思いを考えよう。	○　今の自分たちにできることは何だろうか，と生徒に問いかける。

		・学校の取組を頑張る。 ・次の１年生にしっかり伝える。 ・地域にもっと関心をもつ。 ・参加してみる。	○　学校で頑張ることも，地域に出て実際に参加することも，郷土への思いを具体的に行動であらわす一つの方法であることに気付く。
終末	5　保存会の方の思いにふれる。 6　まとめ	○　資料３を配布し，保存会の方の地域参加に対する熱い思いにふれる。 ○授業で気付いたことを感想にまとめる。	○　ちょっとした参加でも地域の人たちがどれほど喜んでくださるかということに気付かせる。 ○　郷土を誇りに思う気持ちが行動することで強まることに気付かせる。

（オ）資料分析表

研究課題	事業者の取り組み		キーパーソン	地域の特徴・課題
	キーパーソン（内部）	キーパーソン（コミュニティ）（地域住民・ボランティア）		
地域の人とコミュニティを形成する事業	・[illegible] ・「[illegible]」 ・「[illegible]」 ・「[illegible]」	・[illegible] ・「[illegible]」 ・「[illegible]」	活動に積極的なコミュニティ ・[illegible] ・[illegible] ・[illegible] ・[illegible]	・[illegible] ・[illegible] ・[illegible] ・[illegible]
必要な[illegible]を[illegible]する事業	・[illegible] ・「[illegible]」 ・[illegible] ・[illegible]	・[illegible] ・「[illegible]」 ・[illegible] ・[illegible]	意欲さに困難されるコミュニティ ・[illegible] ・[illegible]	・[illegible] ・[illegible] ・[illegible]
地域[illegible]を[illegible]する事業	・[illegible] 「[illegible]」 ・[illegible] ・[illegible] ・[illegible]	・[illegible] ・「[illegible]」 ・「[illegible]」 ・[illegible] ・「[illegible]」 ・「[illegible]」 ・「[illegible]」	熱心な人の思いに気づくコミュニティ ・[illegible] ・[illegible] ・[illegible]	・[illegible] ・[illegible] ・[illegible] ・[illegible]
[illegible]を[illegible]する事業	・[illegible] ・[illegible]	・[illegible]	さわやかに学ぶコミュニティ ・[illegible] ・[illegible] ・[illegible] ・[illegible]	・[illegible] ・[illegible] ・[illegible] ・[illegible]
[illegible]を[illegible]する事業	・[illegible] ・[illegible] ・「[illegible]」 ・[illegible] ・「[illegible]」	・[illegible] ・「[illegible]」		

（カ）板書例



【板書の構成】

板書は，前半では取組に否定的だったユウジが，中心発問を考える中でより深い思いに気付いていった，という心の変化がわかるように対比的な構成にした。また，「それだけじゃないんだ。」というユウジの発言を後半で考えるので，授業のはじめに，みんなが体験活動で頑張ったこととユウジが体育祭で頑張ったことが同じであるということがわかるようにした。そのうえで『それ』だけではない『何』をユウジがつかんだのかということを考えさせて，生徒から出てきた意見をキーワードにして書いていくようにした。

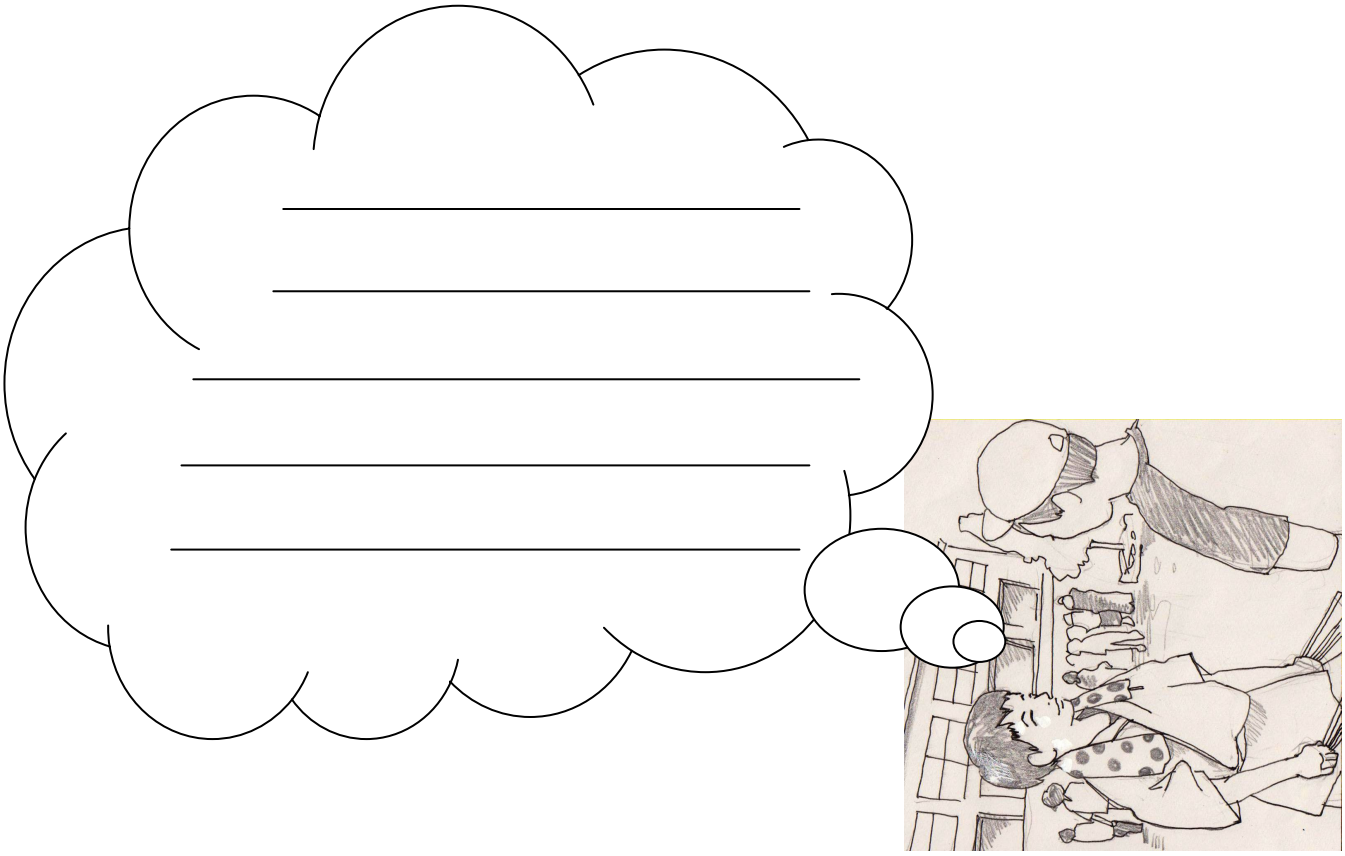
（キ）ワークシート

考えるポイント

年　　組　　名前

○「胸がいっぱいになった」とあるが、このときエミルはどんなことを考えたのだろうか。

○「それだけじゃなかった」といったエミルの、心の中のセリフを考えよう。



（２）活用のポイント

本資料は，中学校で取り組まれる地域の伝統文化の継承活動に，いまひとつ気持ちがのらないユウジが，保存活動をしているおじいさんたちの真剣な姿に圧倒され，継承者のいない現状を目の当たりにすることで，学校での取組だけでなく，地域に積極的にかかわってみようと思うようになるまでの心情を語ったものである。

生徒は，主として総合的な学習の時間において「里めぐり音頭」の学習をしてきていることから，伝統文化の継承について，保存活動の現状と課題を再確認しながら，今後の自分の在り方を問うことができる。

授業では，主発問だけでなく補助発問（切り返し，ゆさぶり）においても，常に自らの体験を想起させ，自分たちの体験やそのときに感じた思いをもとに考えを深めることができるよう工夫する必要がある。そのことにより，与えられた学校内での取組に終わるのではなく，自分にできることは何かを考え，積極的に地域に出てみようという実践意欲と態度を育てていくことが可能となる。

ア　発問の工夫

主人公ユウジの戸惑いやしんどさ，そして変容を体験活動を通して感じた自分たちの気持ちと比較・対比し，自分のこととして考えられるようにするために，常に体験を想起させるよう留意したい。

イ　体験活動を生かす工夫

体験活動を活動するだけで終わらせないために，体験活動の後に道徳の時間を位置付ける。道徳の時間では，体験活動の中で気付かなかった道徳的価値に気付かせ，一歩踏み込んだ学習をねらい，事後の道徳的実践につながるよう意図しておく。また，体験活動そのものを資料化したことから，価値の押し付けにならないよう留意したい。

ウ　導入の工夫

事前アンケートの結果を提示し，盆踊りや伝統的な地域の踊り（この場合は里めぐり音頭）が，中学生の日常生活とはやや離れている現状があることに気付かせる。

（３）授業の実際―生徒の反応を踏まえて

ア　発問の工夫

資料前段では，自分たちが実際に活動し，そこで感じたことを主人公ユウジが代弁しているような形となっていることから，容易にユウジの気持ちを考えることができた。ユウジの気持ちを問いながら，君たち自身はどうだったのかを重ねて問うことで，ユウジに共感させながら，実際に自分たちが感じたこと，特に自分たちの心の中の弱い部分や否定的な部分について授業の中で素直に表現させた。授業の中では「仕方がないからやっていた。」「そういえば私も，はじめは暑いしたいぎいなと思っていた。」など正直な思いが出ていた。

また，後段では資料を通して生徒自身も知らなかった保存会の人たちの言葉を知ることで，ユウジの胸がいっぱいになった心情を自分のこととしてとらえることができた。授業後の感想を見ても，伝統文化を保存しようとする人々の思いや願いに気付いた生徒や，学校で頑張ることだけでなく，地域に出ていくことも郷土への思いを具体的に行動であらわす一つの方法であることに気付く生徒が多かった。

・保存会の人の思いを知り，とても感動しました。踊りに対してこんな思いがあったことをはじめて知りました。
・ぼくが踊ったことで嬉しい気持ちになる人がいて僕もうれしくなりました。
・自分たちが頑張ったことがこんなにも地域の人たちを喜ばせることができるのかと思うと自分たちも嬉しくなった。
・体育祭だけで終わってはいけないのかもしれないと思った。来年盆踊り会場に行ってみようかなと思った。
・来年，もし用事がなかったら，友達を誘って行ってみて踊ってみようかなと思った。

イ　体験活動を生かす工夫

生徒たちは，体験活動の中で保存会の人々にも実際に会って何度も指導を受けている。しかし，この資料を通して改めて保存会の人々の思いを深く知ることができた。「保存会の人たちが，私たちにどんな思いで教えてくれていたのかがわかった。」「次の１年生にきちんと教えていきたい。」など授業後の感想には改めて伝統文化を継承してきた人々の思いや努力に思いを寄せ，自らが発展させ引き継いでいくのだという思いが伝わってくるものが多くみられた。

ウ　導入の工夫

授業のはじめに事前アンケートを用いたことで，生徒はその結果を興味深く聞いていた。中学生になって盆踊り会場に行った人がいる，ということは生徒たちにとっては意外だったようである。実際には会場に行った生徒はどのクラスも２～３名程度，多くても６～７名にすぎず，その中で実際に踊ったと回答した生徒は今回いなかった。その理由についても「踊りを知らないから」，「興味がなかったから」，「恥ずかしかったから」などの意見が多く，他の生徒に聞いてもその理由に共感する生徒がほとんどであった。また，今後踊りの会場へ行ってみたい，あるいは踊ってみたいと思いますか，との問いに対しては「はい」が５名前後でほとんどの生徒は「いいえ」と回答していた。

生徒たちは，このような結果を知ることで，郷土や地域社会に対する連帯感が薄れていること，あるいはその傾向が強まっているという事実を，資料に入る前に再認識できた。そのことが「里めぐり音頭が絶対に消えないでほしいと思いました。みんなでえのみや神社に行って踊りたいなと思いました。」など，伝統的な地域文化の継承について，より積極的にとらえた意見に結び付いていったのではないかと考えられる。

（４）各教科等（体験活動を含む）との関連

社会科や総合的な学習の時間において，府中町の歴史や史跡について学び，自分たちでグループごとにさまざまな方法で史実や地域の名所を調べたうえで，全員で実際に史跡めぐりを体験しておくことは，資料への興味・関心を高める上で効果的である。

また，音楽科において，「里めぐり音頭」の唄の部分について学習し，日ごろの合唱指導の際にはあまり扱わない邦楽の響きにふれ，地声による発声法を学んだり，歌詞の内容についてグループごとに調べ学習をすすめ，歌詞の意味や内容の理解を深めさせたりすることは，感性の面からのアプローチとして有効である。

（５）心のノートの活用

授業後に，「心のノート」PP.122-123 の「ふるさとに自分ができることはなんだろうか」という部分を活用して，自分たちの住む町の文化的行事について，自分たちにできることはあるだろうかということを考えていくことが可能である。

「里めぐり音頭」を継承していくために自分に何ができるか，ということを考えていくだけにとどまらず，府中町に伝わるそのほかの文化的財産は何があるのかを考えたり，それらについても自分にできることがあるのではないかと，学習を広げていくことができる。

また，「里めぐり音頭」の継承に関する課題を考えるだけでなく，ふるさとである府中町そのもののもつ課題を考えたり，府中町が自分の町であると胸を張って言えるためには何ができるかなどを考えさせることができる。

さらに PP.126-127 の「あなたは『日本の伝統や文化』の頼りになる後継者である」という部分を使って，自分たちの地域にあるすばらしい伝統や文化的行事を再認識させるとともに，自分たちがそれをどのように受け継いでいけばよいか，どのように発展させていくべきかなどを考えることが可能である。